

令和3年度 学校評価に関する考察

【福東小学校】 校長 浅野 哲男

学校課題としての主体的で対話的な取り組む姿勢の育成については、今年度も続くコロナ禍でいろいろな制限を受け、発話の声小さくなりわかりやすく伝えることが十分できない傾向が見られた。けれども、ICTの活用や国語の技カードによる表現の工夫により、よい例を学び自分で使ってみることを通して少しずつ相手意識をもって取り組む姿が増えてきた。

規律を守り自己肯定感を高めるためにいじめ防止に向けた研修を学校一丸となって進めてきたが十分ではなかった。さらに児童会や各学級における温かい言葉を広げたり、にこにこアンケートや教育相談等を活用したりしながら、さらに一人一人に目を向けたり、自分で考える相手の立場にたって考えたりできるようにしていくことが課題である。

【仁木小学校】 校長 増田 浩志

年間を通して、児童生徒の心身の健康安全の確保を一番に取り組んだ。様々な制限や制約があったコロナ禍での教育活動。特に「主体的・対話的な学び」を具現させるための校内研修や研究授業ができなかったことが、評価が高くない要因と分析する。

今年度はタブレット端末の有効活用も含めて、「個別最適な学び」と「今できる精一杯の取組」に全力を注ぐことができた。

来年度はアフターコロナの教育活動、教職員の働き方のより一層の充実に注力していく。

【大藪小学校】 校長 寸田 良隆

コロナ禍において様々な制限がある中で、児童の健康安全を第一と考え児童の実態に軸足を置いた教育活動を推進してきた。特にICTの活用については、ICT活用モデルフィールド校として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識して実践を積んできた。

また、児童の自己肯定感の向上に努め、よさみつけやあったかい言葉かけ活動などの自分のよさを自覚できる活動を工夫してきた。これによって、児童アンケートにおいては、自分のよさを自覚できたと答える割合が増加した。今後は自分の考えをもち、表現することができるように取り組んでいく必要がある。

【輪之内中学校】 校長 三輪 弘文

コロナ対策という制限のある中で、学校生活や授業、行事について、何ができるか、どのようにしたらできるかを、生徒と一緒に考えて話し合い、工夫した1年であった。

特に今年度は、①生徒の思いを「よく聴く」こと(日々の学校生活や授業中は勿論、毎月の心のアンケート後にも)、また、②生徒の「よさやがんばりを目に見える形、耳に聞こえる形にして伝える」こと(かがやきみつけ、学校だより)に力を入れた。その結果、より充実した活動ができたり、前向きで温かい言動がこれまで以上に増えたりした。

今後も、生徒の「命と健康」を第一にしながら、生徒とともに「ひとりだちのできる生徒」が育つ学校づくりを目指していく。

【教育委員会】

令和3年度も、様々な制限や制約があったコロナ禍での教育活動であった。主体的・対話的で深い学びの実現のために、感染症対策をしながらこれまで以上に工夫した活動を実践することができた。制限や制約の活動が多かった半面、勤務の適正化の一つである教職員の時間外勤務時間の削減は大幅に進んだ。小学校においてはほぼ全員の職員が月45時間以内を達成することができた。教育課程の見直しや行事の精選が進められた成果である。

児童生徒の心のケアやいじめの未然防止に力を入れたことで、町全体としてコロナが原因となる不登校やいじめが起こっていないことは成果である。